

家族の諸相

イタリア・ルネサンス期の家族

前之園 幸一郎

14世紀のルネサンス期イタリアにおいて、伝統的な中世的家族構造のゆるやかな変化が顕著にみられるようになる。それは親族や血統関係が重視される拡大家族から、夫婦を中核にして情愛的連帯によって緊密に結びついた家族への過程を示している。

中世における血統的家族の成立は、その背景の一つに次のような政治的理由があげられる。中世には、暴力や戦争や災害や貧困などから人々を守り彼らに公的保護を保障する国家や機関が存在しなかった。そのために、個人は、避難の場所や身体的精神的な保護を家族のなかに求めた。その結果、家族は、血縁者、親族、一族郎党などからなる緊密な連帯感をもつ拡大された集団として発展し、個人に対して物質的・精神的に信頼できる唯一の拠り所となった。

伝統的な家族構造に変容をもたらすことになった主要な要因は、情愛と個人の価値の尊重という意識の芽生えである。フィレンツェの上層商人階級は、市民によるフィレンツェ都市国家の経済的・政治的権力の土台を確立し、活発な経済活動の展開とともに、自ら都市の政治的・行政的な管理運営に参加した。

商人・上層市民の家族は、構造的には男系の垂直的な秩序をもつ中世的な血統的家族の特徴を受け継ぎ、多くの類似点をもっていた。しかし、愛情と自覚的個人の意識にもとづいた商人家族が、経済的、政治的、教育的分野において果たす新たな機能が、一見伝統的で中世家族と異なるところのない商人の血統家族を特徴づけるものとなる。

本研究においては、財産が家共同体ではなく個人に属する富であるという個人主義的な観念の誕生、都市政府に対する参加や納税などの市民の義務についての積極的意識、情愛的連帯によ

る緊密な家族の感情、子どもに対する親の新たなまなざしと子育てへの関心などが、いかに中世的家族の構造を解体に導いたかを主要なテーマとする。

現代における家族の形態と住まい

加藤 由利子

時代の変化にともなってその時代の規範的あるいは標準的家族像は変化し、それにともない住宅のあり方も変化する。

家制度のもとの3世代直系同居家族が一般的であった戦前の日本の住宅は、家長とその客のための空間が重視され日常生活の場は二の次で、家長が家族に対する際の人間関係——ピラミッド型の頂点に家長——を空間化した構成をなしていた。大正昭和初期と都市住宅を中心に変化していくが、第2次大戦後理念としての男女平等の夫婦単位の家族モデルが提示されるようになって大きく変化する。戦争の被害による住空間の狭小化ともあいまって、新しい家族モデルの志向によって不必要な空間がそぎ落とされ、現在につながる住宅が確立していく。家族の集まる部屋と個室からなる住まい、それまで陽の目をみなかった家事労働の場の合理化と快適性の追求などである。この動向は高度経済成長期をむかえ、農村人口が都市に流入し、また都市の生活様式が、電化製品とともに農村の生活様式を変えていく中で全国的に普及していく。またこの時期に核家族化がすすむ。夫は会社人間、妻は家事育児というマイホーム主義により郊外住宅地の1戸建てが「住宅双六」のあがりとして認識され、都市はスプロールによって拡大していった。

現在そして21世紀は家族の多様化の時期として捉えることができよう。産業構造の変化の中

で、女性の高学歴化、社会参加の拡大から、家庭機能の外部化により家族から解放され、みずからの生活パターンを重視する女性が増加している。また家族構成員も家族への依存度を低めている。高齢者の場合も同様で同居は減少傾向を示している。家族は夫婦と子供を中心にしたものとは限らなくなっており、一人暮らしも、夫婦のみ世帯も家族の1類型として捉える時期が来つつあると考えられる。人口問題研究所の将来推計によると、2010年の家族類型は、親と子からなる世帯が40%と半数を割り、いっぽう単身世帯が28%、夫婦のみの世帯が22%と小規模の世帯が半数を占める。その多くは高齢世帯で占められている。大正9年31%を占めた直系家族は、数%しかない。家族の多様化に対応し、住宅も多様化の時期をむかえているが、同時に住宅をとりまく各種施設の充実や環境整備がいよいよ重要性を増しているといえよう。

現代アメリカ小説に描かれた夫婦

—フィッツジェラルドとヘミングウェイ

宮内 華代子

「私は結婚したとたん、後悔した。結婚したのは間違いだった。私たち二人は違う世界の人間だった…」一人娘スコッティ宛の手紙の中にこのように書いているF・スコット・フィッツジェラルド(1896-1940)は、しかし、生涯、離婚はしなかった。アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)は再婚の数カ月前に離婚してはまた結婚するということを繰り返し、4度結婚した。

第一次世界大戦後に出現したフラッパーと呼ばれた「新しい女たち」の生態を赤裸に描いたフィッツジェラルドは作品にどのような夫婦を登場させているだろうか。精神病医ディック・ダイヴァーは富豪の精神分裂症患者ニコル・ウォレンと結婚するが、夫として医師として心身ともに消耗しきって、妻のもとから去る。([「夜はやさし」]) チャーリー・ウェイルズは真夜中の吹

雪の中に妻ヘレンを閉め出し、ヘレンはそれが原因で肺炎にかかって死ぬ。([「バビロン再訪」])

トムとディジー・ブカナン夫妻は、不倫三昧の末、夫は愛人を自動車にひき殺され、妻は愛人のギャツビーを裏切り、ギャツビーはディジーの身代わりになって銃殺される。([「偉大なギャツビー」])

恋愛遊戯に耽る放埒なフィッツジェラルドのフラッパー娘たちとは対照的に、献身的で従順で一途に一人の男性を愛する健気な娘をヒロインにして「武器よ、さらば」や「誰がために鐘は鳴る」のなかでヘミングウェイは熱烈な恋愛を書いた。しかし彼も夫婦を取り上げると、その不和、対立、敵愾心、孤独、怨念、憎悪が主題となる。医師の妻は、医学を拒否するクリスチャン・サイエンスの熱心な信者で、夫とは完全な性格不一致、夫婦の関係はまともな会話が成立しないほど寒々しい。([「医師と医師の妻」]) 雨のため旅行先の異国のホテルの一室に夫と二人で閉じ込められた妻は、夫に相手をしてもらえず寂しさをつのらせる。([「雨の中の猫」]) アフリカでの狩猟旅行中、妻のマーゴットは猟銃から発射した弾丸を夫マコーマーの後頭部に命中させて、夫を殺す。([「フランシス・マコーマーの短い幸福な一生」])

本研究ではフィッツジェラルドとヘミングウェイをあくまでもアメリカ文学史上「失われた世代」と呼ばれる一群の作家たちの代表として捉える。同時代に人気作家となった同世代の二人は、第一次世界大戦と、戦後のアメリカに空前の経済的繁栄をもたらした1920年代、国籍喪失者としての生活を送ったバリ時代、大恐慌の30年代を生き抜いた。二人とも、様々な夫婦を作品の中心人物に据えて描き出したが、「仲睦まじい幸せな夫婦」は見当たらない。それは何故なのか。両者とも実際の自己の体験を作品化するという意味での極めてパーソナルなタイプの作家であったことから、まず作中の出来事と伝記的事実との照合を試みたい。さらに彼らが生きた時代の歴史的、社会的激変、それに伴う風俗と道徳の革命と、この作家たちが作品に描いた夫婦の悲劇、結婚の損傷との関連を考察する。